

錢肅潤の交遊關係について——『十峰詩選』を手がかりに——

小塚 由博

はじめに

1. 『十峰詩選』の内容と特徴
 2. 『十峰詩選』の評語と評者について
 3. 『十峰詩選』に見る錢肅潤の交遊について
- おわりに

はじめに

前號^{〔1〕}では、明末清初の文人錢肅潤が同時代の人物の文章を集め編纂した叢書『文澌初編』（以下『文澌』と稱す）の内容や特徴等について論じた。その際、『文澌』に收められた作品の作者及び評語の作者と、編者である錢肅潤との關係についても多少言及したが、これが『文澌』の編纂にどのように、またどれほど影響があったのか等については、充

分に論じることが出来ず、まだまだ不明な点が多い。そこで本稿では、錢肅潤の作品を集めた『十峰詩選』の内容や特徴を踏まえた上で、そこに見られる交遊關係等について調査し考察を加え、ひいては明末清初の江南を中心とする文人たちの交遊ネットワーク解明の一段階としたい。

1. 『十峰詩選』の内容と特徴

a. 錢肅潤について

錢肅潤については前號も参照されたいが、簡単にまとめておこう。錢肅潤（二六一九—一六九九²）字は礎日、號は十峰。江蘇無錫の人。東林・復社系統の鄒期相（高攀龍の門人）・馬世奇（一五八四—一六四四）や錢陸燦（二六一二—一六九八）に學んだ。明末に諸生となったが、閒もなく明は滅亡し、辭めて故郷に戻り隱居し、各地を周遊した。その様子は自傳「十峰主人傳」（『文澂』卷十五）に見られる。彼は作品制作に力を注ぐ傍ら、門人たちに學問を教授した。順治十一（一六五四）年³に清朝に捕らえられて獄に繋がれ、片足を損なう。釋放後、自ら「跛足生」と名乗った。その後、彼の名聲はますます高まり、四方の者はみな彼を「東林の老都講」と呼んだ。その門人は秦松齡・董閻・朱廷鑑等、名士が多かった。その詩文の才能は錢謙益・王士禛らに、その學問は禮部尚書の魏裔介らに高く評價された。編著として『尙書體要』六卷・『道南正學編』三卷・『南忠記』一卷・『文澂』二十卷、作品集として後述の『十峰詩選』『十峰文選』等がある。

b. 『十峰詩選』について

錢肅潤の作品集として比較的閲覽しやすいものとしては、管見の限り『無錫文庫』第四輯所収の『十峰詩選』⁴である

う。⁵ 本稿ではこれに據って、以下その内容や特徴をまとめた上で、そこに見られる錢肅潤の交遊関係について考察を加えたい。なお、作品の前に附された徐志鈞氏の解説によると、「本書は康熙五（一六六六）年刻本によって影印した（本書據康熙五年刻本影印）」とあるが、その原本の所藏先等、詳細については記されていない。⁷

この作品は『十峰詩選』と題されているが、実際には以下のような構成となっている。

（1）『十峰詩選』七卷

（2）『十峰詩選二集』七卷（七卷は未完）

（3）『十峰文選』七卷（卷一は「史論」と題す。歛卷・歛葉多し）

もしかすると、これらはもともと一つの作品集（『十峰草堂集』⁸か）だった可能性も考えられる。また、序文のみが存在する『十峰草堂詩餘』もあったと推定されるが、⁹これらが初めから一つの作品としてまとめられていたものなのか、また現存するの否か等、詳細は不明である。

以下、本稿では便宜的に『十峰詩選』を『詩選』、『十峰詩選二集』を『二集』、『十峰文選』を『文選』と稱し、敢えて『十峰詩選』と稱した場合は、基本的にはこれら三作品の總稱として用いることとする。

①『詩選』七卷

目次によると、その構成は以下の通りである（（ ）内の数は論者による）。

卷一 五言古詩 三十一首（二十七題）

卷二 七言古詩 二十七首（二十七題）

卷三 五言律詩 三十六首（三十二題）

卷四 七言律詩 九十首（八十一題）

卷五 五言排律 八首（八題）

卷六 五言絕句 三十七首（六題）

卷七 七言絕句 五十首（三十四題）

以上、計278首（215題）の詩が詩體別に收められている。また、目次の題目一行目「十峰詩選目錄」の下に小文字で「自乙酉至丙午」とあり、乙酉（順治二（一六四五）年）から丙午（康熙五（一六六六）年）の間の詩が收められていることが窺える。

『詩選』には、以下のように多数の人物の序文や批評等が附されている。

(1) 錢謙益「十峰詩序」¹⁰（玄默攝提格「壬寅〓康熙元（一六六二）年」如月十一日）

(2) 馬瑞「十峰稿序」

(3) 錢陸燦「十峰詩選序」（康熙丙午（一六六六）年八月朔日）

(4) 吳懋謙・龔策・黃錫朋「詩評」

(5) 嚴沆「贈言」

錢謙益（一五八二—一六六四）は、上記「十峰詩序」において以下のように評している。まず錢謙益は、無錫出身の顧・高兩先生（恐らく東林派の學者顧憲成（一五五〇—一六一二）と高樊龍（一五六二—一六二六））の事を指すのであろう）の儒學者としての才識を稱え、普通なら兼ね備えるのが難しい理學・氣節・文章の三者を兼ね備えた人物だと評し、¹¹ 話題はその同郷であり弟子筋にあたる錢肅澗のこととなる。

…礎日は慎み深い儒者で、道徳を磨き、名節を研ぎ、その文章の淵源は經學から來ており、ますます文學者の境

地に到り、その垣根を越えようとしている。なんと理學・氣節・文章を以て自ら任じているではないか。先頃、礎日は梁溪（無錫）より我が半野堂を訪ねてきて、長律六十韻を贈ってくれたが、そこで私について過分に褒め稱えてくれており、豊かな文采で満ちあふれていた。次いでそのふだん制作した「十峰詩」を取り出して我が序文を求めた。その詩に目を通すと、目を見はり心動かされる出来映えで、ため息をついて嘆じて言った。「ああ、礎日の人となりが分かるなあ」と。礎日は理學・氣節・文章の模範であり、だからその詩は、意思は高揚し、元氣は渦巻き、純粹に中正に歸するものなのである。……

……その詩を読み、その人となりを觀察すると、礎日は理學の文章の模範である。願わくは礎日よ自ら愛し自ら勉め、兩先生に愧じることなきよう。謹んで序す。¹³

また、その刊行の経緯等について、錢肅潤の師でもある錢陸燦（錢謙益の族子）が序文で以下のように記している。

礎日は以前詩數百葉を翻刻した。庚子（順治十七（一六六〇）年）の冬、僕は友を廬江縣（現在の安徽省合肥市にある）に訪ねようとしたが、風雪で道が塞がり、疲れて梁溪（無錫）の洞墟宮（道觀）で休憩を取ることにした。（その時）礎日が詩を選び終わったら、その書籍に序文を書く約束になった。丙午（康熙五（一六六六）年）、『十峰詩選』が完成し、僕のいる秣陵（南京）に寄越して、以前の約束を果たすよう促した。礎日が手紙で僕に報じて言うには、「わたたくし潤には史論數十篇があり、現在の相國（尙書）¹⁴である柏郷公（魏裔介）に高く評價されました。我が家は妻子を食べさせることさえも難しく、北に行つて柏郷公にお目にかかり私が制作した詩を獻じようかとも考えているほどです」と。私は手紙でお祝いを述べて言った。「あなたが遭っているのは、きつと韓退之（韓愈）よりも凄い境遇であろう。¹⁵……」

……山左（山東）の宋荔裳（琬）・王西樵（士祿）・阮亭（士禎）兄弟、吾が郷の董玉虬（文驥）・蕭の木・馬野臣、

海寧の陳謝浮（論）諸兄は、かつて（諸氏の）作品を品評した時、あなたの詩が（話題に）出た。そこで僕があなたの詩を選んだ事に間違いがなかったことを知らされた。そこで序文を作ることにしたのである。¹⁷

以上の記述から、『詩選』の刊行年は康熙五（一六六六）年で疑いないが、すでにこの時点で後述の「史論」に関する記述が見られるのも、注目すべきであろう。

② 『二集』七卷

目次は無いが、作品中を確認するとその内訳は以下の通りである。

卷一 五言古詩 三十八首（二十一題）

卷二 七言古詩 五十九首（五十七題）

卷三 五言律詩 十八首（十五題）

卷四 七言律詩 四十六首（三十七題）

卷五 五言排律 三首（三題）

卷六 五言絶句 十三首（七題）

卷七 七言絶句 十六首（十題）

なお、卷七は途中で終わっていて歛葉があると思われる、『詩選』よりも若干少ない全193首（151題）の詩が收められている。

この『二集』には、以下のような序文や題辭等が附されている。

（1）吳興祚「詩序」（丙午—康熙五（一六六六）年）

(2) 周龍甲「序」(康熙己酉冬日—康熙八(一六六九)年)

(3) 湯調鼎「序」(戊申寅月—康熙七(一六六八)年)

(4) 蔣超／梁鉉／王士祿「與錢礎日書」(丙午冬日—康熙五(一六六六)年／丁未—康熙六(一六六七)年／庚戌

秋日—康熙九(一六七〇)年)

(5) 「題辭」(曹爾堪／施潤章／宋德宜／嚴我斯／李天馥／程康莊／施端教／湯調鼎／紀映鍾／戴本孝／顏泰颺／吳啓思／顧有孝)

この外、「二集鑑定」として吳興祚の名が擧げられている。

ここでは、周龍甲(字は霖公)の序文からその特徴を見てみよう。

：わが友錢子礎日は、その筆致は奇である。ふだん洞庭湖や彭蠡湖をめぐり、山川の中に楽しみ、雲やもやの中を散策した。だから發して文章とすればそれは自ずと山のようにけわしく、精神が高揚するかのような趣があり、その筆致からあふれ出てくるかのようである。錢子はきつと子長(司馬遷)の流であろうか。ある日、私は(錢子と)ともに山左(山東)の青齊(青州・齊州)・海岱(勃海・泰山)の地に至り、隅々まで見て回った。錢子は各地に至るたびに、素晴らしい筆致でこれを傳えた。三年が経ち、詩詞傳記は累々と書籍となるほどになったが、詩が最も多かった。家に歸り、出版する運びとなって序文を私に求めた。私が思うに、錢子の詩は、周遊することによって作られたものである。錢子は決してみだりに詩を作る者ではない。非常に豪俠で平原君のような者がいればこれを詩を詠み、非常に忠義なこと顔魯公(顏真卿)のような者がいればこれを讀み、帝王を詠むのは舜や禹、聖賢を詠むのは孔子や顔子・閔子のような者である。太公望や伯夷が隠れ住んだ所を過ぎれば詩を作り、秦・漢・唐・宋の封禪の地を過ぎれば詩を作った。淳于髡の豪放さや、魯仲連の度量の廣さ、伏生の博學さ、李太白の風流さ、

范楚公（范仲淹）のような徳政があれば、誇張して掲揚し、これを詠嘆した。時は下って趙松雪（孟頫）や李于麟（攀龍）の遺風がまだ残っていたれば、夢中になってやまなかった。最も異彩を放っているのは、「杓突泉歌」（『二集』卷二）一章であり、昔の鬱屈してやるかたないのと、大いに鬱屈しても大いに氣ままにする者と、何度も繰り返しの憤懣やるかたない氣持ちを明らかにし、千年の間これを見るかのようである。ああ、錢子の詩は、周遊したことでますます筆致が奇になったというのは本當であろうか。その奇は絶対に周遊したことにあるに違いない。錢子の旅はあまねく五嶽に遊んでことごとく胷中の奇を發しようとしたのだ。その原因はこれ以外考えられない。¹³⁾

以上のように、周龍甲は錢肅潤がたびたび各地を周遊したことが、彼の文學性を形成したと述べており、實際に各地に立ち寄った時に詠じられたと思われる詩がしばしば見られる。

詩の制作年代については、『二集』中に「戊申元旦」（卷二）、「癸丑暮春、劉石芝學憲招遊西湖、劉子肆宵拈山外青山樓外樓句限韻賦詩、余倚舷和之」（卷七）、「戊午暢月念二日、自楚東下舟泊皖江、同汪望嵩謁郡司馬雲樵余公、開筵命酌賦詩贈之」（卷二）等の詩があり、つまり戊申（康熙七（一六六八）年）、癸丑（康熙十二（一六七三）年）、戊午（康熙十七（一六七八）年）である。また、前述の各序文は一六六六年から一六七〇年にかけて制作されているが、掲載作品等から考えて實際に『二集』が編纂されたのは一六七八年以降であると推定される。

③ 『文選』七卷

作品中に見られる序文とその作者は以下の通りである。¹⁴⁾

(1) 高世泰 「史論敘」

(2) 錢肅潤 「史史引」

(3) 陳瑚「錢礎日史論序」

(4) 陳維崧「序史論」⁽²⁰⁾ (壬辰(順治九(一六五二)年)春陽)

(5) 董閏「史論小序」(康熙甲辰(康熙三(一六六四)年)三月)

(6) 秦松齡「史論序」(康熙歲癸卯(康熙二(一六六三)年)冬之月)

(7) 錢宮聲「序」(壬子[康熙十一(一六七二)年]季冬) — 卷末

これらは(7)を除いて残りは全て卷一「史論」に關する序文であり、『文選』中にはこの文集全體について記した序文は殆ど見られない。⁽²¹⁾(7)も内容的に『十峰詩選』全體の序文であると思われる。

ただし『文潔』卷五に鄒陞(字は九揖、號は幼圃、江蘇無錫の人)の「十峰文選序」があり、それによるとその編纂等の經緯について以下のように記している。

『十峰文選』は、錢子礎日の著作である。錢子は我が一族の姉の夫である。若い頃私と勉學をともにしたが、文章の譽れは最も早かった。すでにまた私と文學の會を行つたが、四方の諸君子で錢子と交遊することを願わない者はいなかった。この時錢子はすでに古文・詩歌に巧みであった。甲申(順治元(一六四四)年)後、錢子は高節を立てたが、私は世の流れに身を任せているだけで、錢子に耻じ入るばかりである。その後それぞれ四方に出かけ、僅かながら離ればなれになったが、前後して郷里に戻り、錢子はことごとくふだん制作した著書を取り出して私に示した。(錢子の)詩は泰山關里(孔子の教え)を第一とし、その文章は盛大博學で、議論を加える事は、蘇氏父子(蘇洵・蘇軾・蘇轍)に耻じないものであった。その門人の秦太史對巖(秦松齡)は、「(錢子は)善きことは勤め、惡しきことは無くさせる」と稱し、董太史方南(董閏)は廬陵(歐陽脩)に喩えて師の見識を稱贊している。私が思うに、錢子は當代の文中子(隋・王通)大勢の優れた門人を持ったこと(22)で知られる(23)である。⁽²⁴⁾

また、同じく『文瀾』巻五掲載の方來（字は聖祥。浙江錢塘の人。康熙九（一六七〇）年の進士）の「十峰詩選序」があり、以下のように述べている。

…今年の秋、礪日錢子と鄂州（湖北武漢）で會見した際、まだその詩を讀んでいなかったが、古文詞數十首を出して、子霞（毛會建）に與えた。毛子がこれを讀むと、「筆致が沸き上がり、議論は波立つこと江河かわが岷・嶓に基づくように整然と、諸儒が異同を白虎觀で校訂するかのように盛んである」という。恐らく長年古を學び經を窮めているからであろう。だから大きな風が吹いて雲が湧き起たり、段階を踏んで事を進めるのは、きつと今日の作者の林である。⁽²⁶⁾

ここでいう「今年」とは、もしかすると錢肅潤が湖北を訪れた康熙十七（一六七八）年のことかもしれない。⁽²⁷⁾

徐志鈞氏によると、この『文選』の卷一は「史論」であり、以下卷二から卷七までは古文が収録されているとする。⁽²⁸⁾ 何故そのような構成になっているのか。

門人でもある董間の「史論小序」には次のように記されている。

…わたくし間は辛丑（順治十八（一六六一）年）の年より先生のお供をして出かけることができました。先生の學問は日に日に高みに向かい、先生を慕って門人になる者は日に日に多くなりました。わたくし間はというと、（現在）遠く百里の外に隔たれて、朝夕ずっとご機嫌を伺うこともできない状態がしばらく続いています。今年の春、かたじけなくも著書の「史論」一編に文章を記すようお願いになりました。この先生の「史論」は、栢郷の魏公（裔介）の品評と諸大家の評定を経て、自ずと千古に足るものであり、後學たちが贊美して稱えるに値するものです。⁽²⁹⁾

また、前掲錢陸燦の『詩選』の序文にも見られるように、これはやはり「史論」が魏裔介の評價を得たことが大きく

影響していると思われる。實際に『文選』の版心を見ると、「史論」の部分には「史論一編 卷一」と「史論」と明記し、卷二以降は單に「十峰文選 卷〇」と記されていることから、「史論」をかなり特別視していた様子が窺える。また、前述の通り陳維崧の「序史論」は他の序文よりも制作年代が早いこと等から見ても、あるいは元々「史論」は魏裔介に見せるために既に別に纏められていて、それが後に『文選』に組み込まれたのではないかと考えるのが妥當であろう。

「史論」には目次があり、それによると、末尾に錢肅潤の記述として「この巻には以前二十餘首あつたが、今柏郷の魏相國（裔介）の選本數首と照らし合わせて掲載し、すでに残りは全て刪去して掲載しなかつた。「近稿」（最近の原稿）はみな大家が評定したものにより、あわせて集中に入れ、集めて一卷とした³⁰」とあり、各作品の題名の下に割り注で、「今文選洄集選本」「今文燕臺集選本」「近稿」とその出所が記されている。『洄集』は魏裔介の編であるが、現存の『洄集』十卷は、他者の詩を集めた詩集總集であり、文章を集めたものが他にあつたのか否かは不明である。また、『燕臺集』は、錢肅潤とも關係のある田茂遇（字は髯淵。江蘇華亭の人）編纂の叢書『燕臺文選』八卷（補遺一卷³¹）のことと考えられる。『燕臺文選』卷六に「李膺論」と「龐徳公論」が収められているが、「龐徳公論」は「史論」に含まれていない。この『文選』に編入するために、改めて作品を厳選した様子が見てとれる。

以上を踏まえた上で、『文選』の具體的な構成を見てみよう。

「史論」掲載の17作品を分類すると以下の通りになる（ ）内は作品の數。作品名の前の數字は通し番號）。

「今文選洄集選本」（8） — 1 「唐虞論」、2 「湯武論」、7 「田譚論」、8 「張良論」、「諸葛武侯論」、「張許論」、「顏常山平原論」、「方正學論」

「今文燕臺集選本」（1） — 「李膺論」

「近稿」（8） — 3 「周公論」、4 「周宣王賢臣論」、5 「周平王東遷論」、6 「荀揚大醇小疵論」、9 「麒麟閣功臣論」、

「雲臺功臣論」、「晉七賢論」、「瀛州學士論」

卷二以降は残念ながら歛葉・歛卷が多く、現存するのは以下12作品だけである（一）内は作品数。

卷二（2）——「重脩儲貞義公祠堂記」「來說樓記」

卷三（7）——「魏相國聖學知統錄後序」（附「魏相國復書」）「蔣中完先生五經圭約後序」「龔合肥先生詩集後序」「嚴存庵太史東遊草序」「施匪莪嘯閣文集序」「傳徽錄後序」「重輯本支宗譜後序」

卷四（1）——「上魏總憲石公先生書」

卷五（歛）

卷六（1）——「仲夫子廟碑」

卷七（1）——「反乞巧文」

以上から察するに、卷一は史論、卷二は記、卷三は序、卷四は書……と文體別に分類していたものと考えられる。

なお、歛卷が多い理由として、徐志鈞氏は「恐らく錢肅潤が世を去った後に文字獄が頻繁に起こったため、家の者或いは作品を所藏していた者が禍から逃れるために一計を案じ、何か問題となりそうな文章を削除したが、全て無くすことに忍びなかったので（遺したので）はないか」と推測しているが、その眞偽は不明である。

なお、『文瀲』所收の錢肅潤作品は25作品あるが、そのうち『文選』と重複しているのは、「重脩儲貞義公祠堂記」「文瀲』卷十一）「魏相國聖學知統錄後序」（『文瀲』卷三）の2作品だけである。もしかすると、他の作品ももともとの『文選』に掲載されていたのかもしれない。

2. 『十峰詩選』の評語と評者について

『十峰詩選』には、ごく稀に評語がない場合（連作詩は原則として最後の詩にだけ附ける等）もあるが、例外を除きほぼ大多数の作品に最低でも1人以上の評者の評語が附されている。その数は、のべ214名、489箇所となる。なお、その主要人物については、次章で述べることにする。

まずは、各作品ごとの評語数と評者数を示すと、以下の表1の通りである。

表1. 出身地別評者数一覧

順位	地方	詩選	二選	史論	文選	計	順位	地方	詩選	二選	史論	文選	計
1	江蘇	54	33	7	0	102	8	福建	0	2	0	0	2
2	浙江	7	7	1	0	15	10	四川	1	0	0	0	1
3	湖北	0	5	0	0	5	〃	陝西	1	0	0	0	1
〃	江西	1	3	0	1	5	〃	廣東	0	1	0	0	1
〃	山東	3	1	1	0	5	〃	湖南	0	1	0	0	1
6	河北	0	2	1	1	4	不明	不明	31	35	0	0	66
〃	安徽	0	4	0	0	4	計	計	98	95	10	11	214
8	山西	0	1	0	1	2							

※数はのべ人数で、同一人物が重複している場合もある。

全體的に見て、壓倒的に江蘇地方の人物が多く、とりわけ無錫の人物が多い（『詩選』18名、『二選』）のは、錢肅澗の出身地であることを考えれば、ごく自然なことであり、次いで浙江が多いのも妥當である。以下、作品集ごとに評語の評者や評語数等について表にまとめておきたい。

① 『詩選』の評者と評語

『詩選』には評者としてのべ98名、287箇所の評語が附されている。その内、評数が多い人物とその評数は以下表2の通りである。

表2. 『詩選』の評者とその評語数及び『詩選』の登場作品数

順位	2	3	〃	〃	6	7	〃
姓名	錢陸燦	顧有孝	秦松齡	孫枝蔚	何紘度	徐晟	任元祥
字號	湘靈	茂倫	對巖	豹人	石湖	禎起	王谷
出身	江蘇常熟	江蘇吳江	江蘇無錫	陝西三原	浙江臨海	浙江嘉興	江蘇常州
評語數	18	13	13	13	10	9	9
作品數	1	1	1	0	0	0	0
順位	13	14	〃	〃	〃	18	19
姓名	顧景文	黃傳祖	黃永	黃百朋	董以寧	管正儀	歸莊
字號	景行	心甫	雲孫	珍百	文友	元翼	元恭
出身	江蘇無錫	江蘇無錫	江蘇武進	江蘇宜興	江蘇武進	江蘇長洲	江蘇崑山
評語數	5	5	5	5	4	3	3
作品數	0	0	1	4	1	0	0

順位	姓名	字號	出身	評語數	作品數
11	楊 周	組玉	江蘇吳江	7	2
10	周 安	安節	江蘇吳江	8	1
〃	彭 年	鴻叟	江蘇無錫	9	0
〃	樂 莘	子尹	江蘇無錫	7	1

順位	姓名	字號	出身	評語數	作品數
〃	馬 瑞	大 林	江蘇無錫	3	0
〃	秦日新	映 碧	江蘇無錫	3	2
〃	吳懋謙	六 益	江蘇華亭	3	0

※字號は文中に登場するものを記す。 ※掲載作品數は詩題數とする。以下同じ。

※この他、3箇所の評語の評者として、繆維揚・翁旋士（以上、名・出身等詳細不明）がいる。

その他、特筆すべき人物としては、陳維崧・計東・陸圻・孫治・戴笠（以上2箇所）、宋實穎・顧彩・宋琬・姜垓・徐崧・毛先舒（以上1箇所）らがいる。

最も多い黃家舒をはじめ、門人の秦松齡や師馬文忠の甥である馬瑞、また彭年・樂莘・顧景文・黃傳祖・秦日新ら錢肅潤と同郷の無錫の人物が多い。全體的にも江蘇や浙江等、所謂江南地方の人物が大半を占めている。また、唯一陝西出身の孫枝蔚も清の世に入ると江蘇地方に身を寄せているので、全體的に身近な知人・友人に評語を依頼していることが分かる。

② 『二集』の評者と評語

『二集』には評者としてのべ95名、174箇所の評語が附されている。その内、評語が多い人物とその評語は以下

表3の通りである。

表3. 『二集』の評者とその評語数及び『二集』の登場作品数

順位	姓名	字號	出身	評語數	作品數	順位	姓名	字號	出身	評語數	作品數
1	周體觀	伯衡	河北遵化	23	0	〃	周龍甲	霖公	江蘇淮安	3	2
2	毛會建	子霞	江蘇武進	13	2	11	閻爾梅	古古	江蘇沛縣	2	0
3	湯調鼎	右君	河北清河	9	1	〃	王士祿	西樵	山東新城	2	1
4	魏憲	惟度	湖北黃岡	8	1	〃	潘耒	次耕	江蘇吳江	2	2
5	劉	肆宵	?	7	1	〃	馬瑞	大林	江蘇無錫	2	0
6	顧有孝	茂倫	江蘇吳江	4	1	〃	陳維岳	緯雲	江蘇宜興	2	0
7	紀映鍾	伯紫	江蘇江寧	4	2	〃	張汝瑚	夏鍾	福建晉江	2	1
8	程康莊	崑崙	山西武鄉	3	0	〃	曾晄	庭聞	江西寧都	2	(1)
〃	曾燦	青藜	江西寧都	3	1	〃	〃	〃	〃	〃	〃

※その他、2箇所の評語を附した評者として、趙今至・潘大也・周子敦・關若韓・陳義扶・李仁熟・劉石芝（以上、名・出身等詳細不明）がいる。 ※作品數の（ ）は他集の登場數。以下同じ。

その他、特筆すべき人物としては、王暉・陳玉璣・嚴我斯・施閏章・宋德宜・杜濬・黃周星・顧炎武・宗元鼎・歸莊・秦松齡（以上1箇所）らがいる。『二選』の評者も『詩選』と同様に江南の人物が多い。ただし、河北や湖北・福建等

遠方の人物も見られ、彼らにいつどのように評語制作を依頼したのかについては更なる調査が必要であるが、例えば、1番目の周體観は、錢肅潤が河北周邊に赴いた時かもしれないし、周體観が江南池太道の道尹に赴任した時かもしれない。また、3番目の湯調鼎は、錢肅潤に「送別湯右君還清河」（『二選』卷二）詩があり、詳細は不明だが錢肅潤の元に訪ねてきた際に、評語制作を依頼した可能性も否定できない。張汝瑚については、後述（第3章湖北人物の譚篆の項）の通り、湖北竟陵での酒宴にも参加しており、或いはこの席で依頼したとも考えられる。以上のように、錢肅潤が旅先で依頼するケースがまま見られるが、その詳細については、今後の課題としたい。

③ 「文選」（「史論」を含む）の評者

『文選』の評者と評語については、卷一「史論」と卷二以降の二つに分けて数えることとする。卷一「史論」にはのべ10名、17箇所の評語が、卷二以降にはのべ11名、14箇所の評語が附されている。その詳細は以下表4の通りである。数が少ないため全員提示する。

表4. 「文選」の評者とその評語数

順位	姓名	字號	出身	卷一	卷二	計	順位	姓名	字號	出身	卷一	卷二	計
1	秦松齡	對巖	江蘇無錫	3	3	6	〃	吳偉業	梅村	江蘇太倉	1	0	1
2	魏喬介	貞庵	河北柏鄉	5	0	5	5	曾畹	庭聞	江西寧都	0	1	1
3	黃家舒	漢臣	江蘇無錫	2	1	3	〃	張能麟	西山	河北大興	0	1	1

順位	4	馬瑞	字號	大林	出身	江蘇無錫	卷一	0	卷二	2	計	2	順位	姓名	宋德宜	字號	蓼天	出身	江蘇長洲	卷一	0	卷二	1	計	1
5	宋畹	荔裳	山東萊陽	江蘇宜興	盛符升	珍示	江蘇崑山	0	1	1	1	1	1	程康莊	崑崙	山西武鄉	0	1	1	1	1	1	1	1	1
〃	周季琬	文夏	江蘇常熟	錢中諧	宮聲	崑崙	江蘇吳縣	0	1	1	1	1	1	錢謙益	牧齋	江蘇華亭	江蘇宜興	0	1	1	1	1	1	1	1
〃	田茂遇	髯淵	江蘇華亭	陳維崧	其年	江蘇宜興	江蘇武進	0	1	1	1	1	1	董以寧	文友	江蘇武進	0	1	1	1	1	1	1	1	1
〃	嚴沆	顯亭	浙江餘杭	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

前述の通り『文選』は歛巻が多く、その全體像を窺うことは難しいが、評者の顔ぶれは、魏裔介・宋畹・錢謙益・吳偉業・宋德宜・陳維崧など、當時の著名な文學者や政治家が多く名を連ねている。とりわけ「史論」は評者を『詩選』『二選』と比べてかなり嚴選している様子が窺える。

④全體の評語數とその評者

以上、『十峰詩選』に見られる評語の評者とその評語數をまとめると、全體的に評語數の多い人物は以下表5の通りである。

表5. 『文選』の評者とその評語数及び登場作品数

順位	姓名	字號	出身	詩選	二集	史論	文選	總計	作品
1	黃家舒	漢臣	江蘇無錫	26	0	2	1	29	2
2	周體觀	伯衡	河北遵化	0	23	0	0	23	0
3	秦松齡	對巖	江蘇無錫	13	1	3	3	20	1
4	顧有孝	茂倫	江蘇吳江	13	4	0	0	17	1
6	錢陸燦	湘靈	江蘇常熟	18	0	0	0	18	1
6	孫枝蔚	豹人	陝西三原	13	0	0	0	13	0
6	毛會建	子霞	江蘇武進	0	13	0	0	13	2
8	何紘度	石湖	浙江臨海	10	0	0	0	10	0
9	任元祥	王谷	江蘇常州	9	0	0	0	9	0
9	徐晟	禎起	浙江嘉興	9	0	0	0	9	0
9	彭年	鴻叟	江蘇無錫	9	0	0	0	9	0
9	湯調鼎	右君	河北清河	9	9	0	0	9	0

※史論―『文選』卷一「史論」 ※文選―『文選』卷二〜卷七

※作品―『詩選』『二集』『文選』（「史論」含む）の作品に登場する数

傾向としてはやはり江南の人物が中心であるが、前述の周體觀や湯調鼎ら、河北等遠方の人物も多少見られる。また、基本的にはそれぞれの作品集ごとに主要評者は別々であって、まんべん無く評語を附しているのは門弟でもある秦松齡ぐらいである。

以上、『十峰詩選』に見られる評語と評者について各作品毎に見てきたが、基本的には錢肅潤の地元や近隣の江蘇・浙江地域の文人たちの評語が大半を占めるが、数は少ないが各地の人物たちの評語が見られる。これは、錢肅潤が各地を周遊した際に依頼して附されたものや、各地の文人が錢肅潤の元を訪ねて附した場合もあったと考えられる。その詳細は別の機會に論ずることとしたい。

3. 『十峰詩選』に見る錢肅潤の交遊について

本節では、以上『十峰詩選』中に登場する人物（評者や各序文の制作者も含む）について見てみることにする。³¹この『十峰詩選』には、評者や詩題・序文に登場する人物は、詳細不明なものも含めると399名もの人物が見られる。彼らの出身地の内譯を見ると、以下の通りとなる。³²

江蘇	144 ³³	(79 + 65)	浙江	25	(15 + 10)	湖北	15	(5 + 10)	安徽	13	(4 + 9)
山東	7	(4 + 3)	江西	5	(3 + 2)	河北	4	(4 + 0)	福建	4	(2 + 2)
湖南	3	(1 + 2)	山西	2	(1 + 1)	河南	3	(1 + 2)	湖南	3	(1 + 2)
四川	3	(1 + 2)	陝西	1	(1 + 0)	廣東	1	(1 + 0)	雲南	1	(0 + 1)
遼寧	1	(0 + 1)	不明	169	(64 + 105)						

また、江蘇地方に限って細かく分類すると、以下の通りとなる。

無錫—無錫35 (19+16)・宜興11 (7+4)・江陰1 (0+1)
 蘇州—吳江23 (12+11)・長洲6 (5+1)・常熟7 (3+4)・昭文1 (0+1)・吳縣3 (2+1)・
 吳門5 (2+3)・太倉4 (2+2)・婁東2 (0+2)・崑山4 (4+0)
 松江—松江1 (0+1)・華亭6 (5+1)・嘉定1 (1+0)
 南京—南京1 (1+0)・江寧4 (2+2)
 揚州—江都3 (1+2)、通州1 (0+1)
 常州—常州1 (1+0)・武進8 (6+2)・金壇2 (0+2)・毗陵1 (1+1)
 鎮江—鎮江1 (1+0)・丹陽1 (0+1)・丹徒1 (1+0)
 泰州—泰州1 (0+1)・興化1 (1+0) 徐州沛縣1 (1+0) 淮安1 (1+0)

以上のように、錢肅潤の故郷である無錫を含む江蘇の人物が壓倒的に多く、次いで浙江と江南が中心ではあるが、たびたび訪れた楚(湖北・湖南)の人物もある程度見られる。

紙数の都合上、その全てについて述べることは出来ないため、特に代表的な人物を中心とし、その他の人物は簡単にまとめることとした。¹⁷⁾ 便宜的に以下のように分類して示す。

①師およびその周邊 ②門人 ③明朝の遺民・官員 ④清朝の官員 ⑤各地の文人

なお、各種掲載状況について、姓名の下に【 】内に示すが、各作品を便宜的に以下のように省略する。『詩集』—詩、『二集』—二、『文集』(卷一「史論」含む)—文、『文澱』—澱。また、それぞれの評語数/作品(登場)数も記した。作品名の傍線は、その作品集に序文等の制作をしていることを示す。

① 師およびその周縁

先に述べた通り。錢肅潤は東林・復社の流れを汲む學者に學び、とりわけ同郷の馬世奇や、高攀龍の門人筋にあたる人物から教えを受けている。

馬世奇【詩0/3】(二五八四—一六四四)、字は君常、諡は文忠。江蘇無錫の人。崇禎四(一六三一)年の進士。官は庶吉士、編脩を授けられる。崇禎十七(一六二八)年三月、李自成が北京に侵入すると、首をくくって死んだ。錢肅潤の師である。錢肅潤に師を悼んだ「過東郊會葬馬文忠先師」(『詩選』卷四)等あり。その弟馬世名(『詩0/1』字は君闇)や、更にその息子で馬世奇の甥にあたる馬瑞(『詩3/0・2/0・文2/0・澱0/2』字は而采、號は大林。崇禎十六(一六四三)年の進士)も見られる。とりわけ馬瑞は錢肅潤との交遊が深い。

高攀龍【詩0/1】(一五六二—一六二六)字は存之、號は景逸、諡は忠賢。錢肅潤の師である鄒期相(無錫の人)の師にあたる。「合忠祠弔高忠憲・馬文忠兩公」(『詩選』卷七)あり。その子高世泰(『詩2/0・文・澱0/2』字は彙旃。崇禎十(一六三七)年の進士)、またその長子高蓮生(『詩1/0』(一六二二—一六七八)字は巖培、號は且齋。諸生)とも交遊がある。なお、弟の高首生(字は節培)は『文澱』の評者である。張夏(二一/0・澱/7)字は秋紹。江蘇無錫の人)は高世泰の門人であり、『文澱』の評者の中心的人物でもある。

華允誠【詩0/1】(二五八八—一六四八)字は汝立、號は鳳超。江蘇無錫の人。天啓二(一六二二)年の進士。高攀龍の門人。明滅亡後、辨髮するのを拒んで殺された。「雲中過龍山弔華鳳超先生」(『詩選』卷三)あり。

錢陸燦【詩18/1・澱0/3】(一六二二—一六九八)字は湘靈、江蘇常熟の人。順治十四(一六五七)年の舉人。明末清初の無錫を中心に活動した文社の一つ聽社の社友の一人。前述馬瑞もその一員である。錢謙益『列朝詩集小傳』の編纂に携わる。「和湘靈兄留別詩」(『詩選』卷三)あり。

②門人

錢肅潤が、明清交代後に大勢の門人を有し、學問を教えていたことは前述したが、錢肅潤の作品中にも様々な門人が見られる。中には詳細不明の人物も多いが、以下列挙しておこう。

秦松齡【詩13／1・21／0・文6／0・漱17／4】（一六三七—一七一四）、字は留仙、號は對巖、江蘇無錫の人。康熙十二（一六七三）年の進士。翰林院檢討、のち國子監司業となる。門人として唯一『十峰詩選』の評語に携わっているほか、『文澱』にも多數の評語が見られる。「出彰義門、答謝周立五・潘仙客・蔣慎齋諸公暨秦對巖門士」（『詩選』卷三）あり。

董閻【詩0／2・文・澱／0】字は方南、號は如齋。江蘇吳江の人。康熙十二（一六七三）年の進士。翰林院檢討。前述の通り、一時期錢肅潤の旅に同行していた。『文澱』に多數の評語が見られる。「贈松陵門人董方南」（『詩選』卷四）等あり。

朱廷鉉【詩0／1】字は玉汝、號は南樓。江蘇江陰の人。康熙二十一（一六八二）年の進士。「贈江陰門人朱玉汝」（『詩選』卷四）あり。

吳道凝【詩0／1】字は子遠。江蘇丹陽の人。順治四（一六四七）年の進士。浙江奉化知縣。畫家としても知られる。「曲阿門人吳子遠善畫詩以贈之」（『詩選』卷三）あり。

その他、蕭璞孫（湖南衡山）⁽³⁸⁾・常石門（湖南永州）⁽³⁹⁾・朱漢直（江蘇吳江）⁽⁴⁰⁾・楊賡音（南蘭）⁽⁴¹⁾・許云吉（安徽歙縣）⁽⁴²⁾・丁永思（安徽潛山）⁽⁴³⁾・蔣六息（安徽懷寧）⁽⁴⁴⁾・楊巨山（江蘇婁東）⁽⁴⁵⁾・吳捷三（湖北漢陽）⁽⁴⁶⁾がおり、その詳細については不明であるが、各地に門人が存在していた様子が窺える。更に「挺秀堂文會詩」（『詩選』卷四）の序文に「吳門章子素文、湘御・陸子予敬、予載・施子又王・家練百兄・虞山繆子洵璠・昆陵楊子組玉・黃子雲孫・董子文友・陳子其年、澄江徐子

景星俱率子弟生徒輩……とあり、また「函碧樓宴集詩「併序」」（『詩選』卷四）には「門程然明・彥明」とあり、陳維崧（其年）や黃永（雲孫）・董以寧（文友）等の名が見られるが、詳細は不明である。

③ 明朝の遺臣・遺民

錢肅潤がそうであったように、東林・復社關連の人物が多く、彼らは清の世となって遺臣・遺民として過ごしたり、復明反清運動に關與したり、また清朝に仕えたりと様々な運命を辿ったが、錢肅潤はそれらの人物と幅廣く交遊している。

錢謙益【詩・文0／1・澱0／1】（二五八二—一六六四）、字は受之、號は牧齋。萬曆三十八（一六一〇）年の進士（探花）。官は禮部尙書。東林黨の重鎮で、文壇の領袖として活躍した。清の世になって一度は官に就いたが、まもなく疑いを掛けられ、辭めて隱棲した。「恭贈虞山牧齋宗伯八十壽詩」（『詩選』卷五）等あり。

馬嘉植【二0／1】字は培原。浙江平湖の人。崇禎七（一六三四）年の進士。官は給諫。「恭輓富湖馬培原夫子詩「併序」」（『詩選』卷一）あり。

杜濬【二1／2・澱1／2】（一六一一—一六八七）字は于皇。湖北黃岡の人。詩人として知られる。明滅亡後は、南京に隱居する。「中秋同杜于皇・潘次耕飲蔣氏一梅亭「併序」」（『二集』卷三）等あり。

鄧漢儀【二0／1・澱1／1】（一六一七—一六八九）字は孝威。江蘇泰州の人。復社の社友。同時代の人物の詩を集めた『詩觀』の編者として知られる。龔鼎孳・周亮工・陳維崧・杜濬・王士禛らと交遊した。康熙十七（一六七八）年、博學鴻詞科に擧げられ、中書舍人を授けられた。「廣陵過桑楚執齋中同杜于皇・鄧孝威・宗鶴問即席賦贈」（『二集』卷三）あり。

姜垓【詩1／1・濼0／2】（一六一四—一六五三）字は如須、號は佇石山人。號は山東萊陽の人。故郷に清軍が侵攻した際抵抗したが父を殺されてしまう。その後は蘇州に隱居する。「答姜如須先生無家詩」（『詩選』卷七）

紀映鍾【24／2・濼0／4】（一六〇九—一六八〇）字は伯紫。江蘇江寧の人。明の諸生。清の世になると、世を棄てて天臺山に出家した。詩人として知られる。「都門端午過紀伯紫齋蒲飲」（『二集』卷四）等あり。

蔣平階【詩1／0・21／0・濼1／1】（一六一六—一七一四）字は大鴻。江蘇華亭の人。明の諸生。清に入つて仕えず。

顧有孝【詩／1・24／0】（一六一九—一六八九）字は茂倫、號は雪灘釣叟。江蘇吳江の人。明末の諸生。康熙十七（一六七八）年、博學鴻詞科に擧げられたが、就かなかつた。『詩選』の主要評者の一人。

徐崧【詩1／1・濼0／1】（一六一七—一六九〇）字は棗之、號は臞庵居士。江蘇吳江の人。明の諸生。「九日徐棗之雨阻堆山園居和韻」（『詩選』卷三）あり。

孫枝蔚【詩／0・濼1／1】（一六三二—一六九七）字は豹人、號は漑堂。陝西三原の人。康熙十七（一六七八）年、博學鴻詞科に擧げられたが、老年を理由に應じなかつた。『詩集』の評者の主要人物の一人。

徐晟【詩9／0・濼3／3】（一六二二—一六八三）字は禎起、號は秦臺樵史。浙江嘉興の人。明滅亡後、父の徐樹丕とともに隱居した。

歸莊【詩3／0・21／0・濼0／2】（一六一三—一六七三）字は元恭、江蘇崑山の人。詩人として著名な歸有光の曾孫にあたり、文章家として同郷の顧炎武と名を等しくした。反清運動に關與。

顧炎武【21／0・濼0／1】（一六一三—一六八二）字は寧人、號は亭林。江蘇崑山の人。復社の社友。甲申の變後は義勇軍を結成して反清運動に關與した。

戴笠【詩2／4・21／0・澱0／1】（二六一四―一六八二）字は耘野。江蘇吳江の人。明の諸生。清の世になると秀峰山に入り僧となった。「庚子上元過官浦和戴耘野」〔『詩選』卷四〕等あり。

その他、王猷定〔詩0／1・澱0／2〕（二五九八―一六六二）字は于一。江西南昌の人。明の貢生、金俊明〔詩0／1・澱1／0〕（二六〇二―一六七五）字は孝章。明の諸生。江蘇吳縣の人、史可程〔詩0／1・澱0／1〕（二六〇六―一六八四）字は赤豹、號は蓮庵。河南祥符の人。崇禎十六（一六四三）年の進士、徐白〔詩0／2〕字は介白。江蘇吳江の人、李實〔一0／1・澱0／1〕（二五九七―一六七四）字は如石、號は鏡庵。四川遂寧の人。崇禎十六（一六四三）年の進士、李長祥〔詩1／1・澱0／1〕（二六〇九―一六七三）字は研齋。四川夔州の人。崇禎十六（一六四三）年の進士。官は庶吉士、沈壽民〔詩0／1・澱0／1〕（二六〇七―一六七五）字は眉生。安徽宣城の人らがいる。

④清朝の官員

前述の通り、錢肅潤は明の遺臣・遺民と交遊する傍ら、時には北京を訪れて清朝の官員とも積極的に交流している様子が窺える。その中には高位高官も多く、その目的の一つは、前掲錢陸燦の序文に見られた魏裔介との交遊のように、生活面での理由もあったのかもしれない。

魏裔介【詩0／2・20／1・文5／2・澱2／3】（二六一六―一六八六）字は石生、號は貞庵。河北柏郷の人。官は太常寺少卿、左都御史、吏部尙書、武會試正考官、内祕書院大學士、太子太保、保和殿大學士等を歴任した。「恭賀魏相國貞菴先生五十初度詩三首」〔『詩選』卷三〕、「擬古八首栢郷魏相國」〔併序〕〔『二集』卷一〕、「魏相國聖學知統錄後序」〔『文選』卷三〕等あり。

宋德宜【詩0／1・21／0・文1／0・澱0／1】（二六二六―一六八七）字は右之、號は蓼天。江蘇長洲の人。翰

林侍讀學士、後に吏部尙書となった。『無錫縣志』によると、時に吏部尙書であった宋德宜は錢肅潤を康熙十八（一六七九）年の博學鴻儒に擧げようとしたが、錢肅潤は足の不具合を理由に断つたという。「宋蓼天太史入都門道經錫山、爲余亡女希曜作表貞詩感而有賦」（『詩選』卷七）あり。

金之俊【詩0／1】（二五九三一—一六七〇）字は豈凡、號は息庵。江蘇吳江の人。萬曆四十七（一六一九）年の進士。明朝では禮部郎中、順德知府、兵部右侍郎等を歴任した。清に入ると順治年間に工部・吏部尙書となり、祕書院大學士まで至つた。「恭賀金相國豈凡先生七十榮壽詩」（『詩選』卷五）あり。

龔鼎孳【二〇／1・文0／1・漱2／2】（一六一六一—一六七三）字は芝麓。安徽合肥の人。崇禎七（一六三六）年の進士。清の世では禮部尙書となる。詩に巧みで、錢謙益・吳偉業とともに江左の三大家と稱された。「雲後赴龔宗伯壽宴有賦」（『二集』卷二）等あり。

周亮工【二〇／1・漱0／3】（一六一二—一六七二）字は元亮、號は樸園。河南祥府の人。崇禎十三（一六四〇）年の進士。福建布政使、都察院左副都御史、戶部右侍郎等の職を歴任した。「寄贈周樸園先生」（『二集』卷二）あり。

嚴沆【詩・文0／1・漱1／0】（一六一七—一六七八）字は子餐、號は顯亭、浙江餘杭の人。順治十二（一六五五）年の進士。官は戶部侍郎。宋琬・施閏章らとともに「燕臺七子」と稱された。「恭祝嚴顯亭都諫尊慈江太孺人七十詩」（『詩選』卷一）等あり。

宋琬【詩1／0・文1／0・漱0／1】（一六一四—一六七四）字は玉叔、號は荔裳。山東萊陽の人。順治四（一六四七）年の進士。官は戶部主事から吏部郎中にのぼり、その後四川按察使となる。

施閏章【二1／2・漱4／4】（一六一九—一六八三）字は尙白、號は愚山。江蘇宣城の人。順治六（一六四九）年の進士。明史編脩、翰林院侍讀。「賣船行爲施愚山少參賦」（『二集』卷二）等あり。

李天馥【二・文0/1】(二六三五—一六九九)字は湘北、號は容齋。安徽合肥の人。順治十四(一六五七)年の進士。のち國子監司業や工部尙書等を歴任し、武英殿大學士に封ぜられた。

吳興祚【詩0/1・二0/1・漱0/5】(一六三二—一六九八)字は伯成。浙江紹興の人。漢軍正紅旗。官は兩廣總督。『二選』の鑒定者でもある。「恭送吳公伯成司臬閩中詩」(『二集』卷二)等あり。

沈荃【詩0/1・二0/1・漱2/2】(一六二四—一六八四)字は貞莢、號は繹堂。江蘇松江の人。順治九(一六五二)年の進士となり、翰林院編脩を授けられる。大梁道副使、直隸通薊道、國子監祭酒等を歴任する。「都門送沈繹堂太史之任大梁」(『詩選』卷四)等あり。

佟岱【詩0/1】(？—一六六三)祖籍は滿州佟佳。漢軍正藍旗。順治十一(一六五四)年に浙江福建總督となったが、同じく漢軍正藍旗の秦世禎と不仲となり、互いに弾劾しあつた結果、佟岱は職を解かれ、都に戻された。「恭輓佟方伯尊公繼亭先生詩」(『詩選』卷四)あり。

王士禛【二2/1・漱0/1】(一六二六—一六七三)字は子底、號は西樵山人。山東新城の人。順治十二(一六五五)年の進士。官は萊州府教授、國子監助教、吏部主事を歴任した。弟の士禛とともに詩名をほしいままにした。錢肅潤の詩才を高く評價した。「贈王西樵考功詩二首」(『二集』卷一)あり。

王士禛【二0/1・漱3/3】(一六三四—一七一二)字は貽上、號は漁洋山人・阮亭。山東新城の人。順治十五(一六五八)年の進士。官は刑部尙書。前述の通り、その著『漁洋感舊集』に錢肅潤に關する言及があり、また詩が一首掲載されている。「贈王阮亭禮部詩二首」(『二集』卷一)あり。

盛符升【二1/1・文1/0】(一六一五—一七〇〇)字は珍示。江蘇崑山の人。康熙三(一六六四)年の進士。官は都察院監察御史。王士禛の門人。「富陽道中同蕭有實何元舉・劉麟公・盛珍示闈若韓諸子」(『二集』卷四)あり。

⑤各地の文人

ここでは錢肅潤の出身である無錫をはじめとして、江蘇・浙江、また中國各地の交遊について地域別に見てみることにする。錢肅潤は清の世になるとしばしば中國各地を旅しており、その様子については、前號でも言及した自傳作品の「十峰主人傳」（『文漱』卷十五）を参照されたいが、錢肅潤の作品中には、その時知り合ったであろう文人たちを詠じた詩も多數見られる。とりわけ各地で催された文會や宴會に關する詩が複數あり、その中には同席した人物の名が多數見られる。その詳細については別の機會に論じたいと思うが、以下代表的な人物について見ておこう。

a. 無錫周邊の文人たち

當然のことかもしれないが、錢肅潤の郷里である無錫・宜興（太湖の西岸部）周邊の文人が交遊の多くを占めている。前述した師の馬世奇や門人の秦松齡やその弟秦松期（詩0/1）字は邳仙、號は漆園。康熙十四（一六七五）年の進士）らも無錫出身である。その秦氏は無錫の名家の一つであり、以下のような人物が見られる。

秦德藻【詩0/1】（一六一七—一七〇一）字は以新、號は海翁。秦松齡の父。「夏日雨後秦子以新招過寄暢園觀澗水」（『詩選』卷四）詩あり。寄暢園は秦氏所有の庭園である。

秦日新【詩3/3・二1/0】號は映碧。康熙年間の貢生。「明龔介眉・岳禎明・秦映碧諸子」（『詩選』卷三）等あり。なお、詩題中の龔介眉（龔百藥、字は介眉）は江蘇毗陵の人である。

また、續柄は不明であるが、秦保寅【詩1/0】字は樂天、號は石山農、秦淦【二0/1】字は漢碧も登場する。黃家舒【詩26/2・文3/0・漱2/2】（一六〇〇—一六六九）字は漢臣。聽社の一員。『詩選』の主要評者の一人である。「放生詩十首和黃漢臣韻」（『詩選』卷七）等あり。

その他、無錫には彭年【詩9/0】字は鴻叟、號は九烟齋、黃傳祖【詩5/0】字は心甫、顧樞【詩1/0】（一六〇二

一六六八)字は所止、樂華〔詩7/0〕字は子尹、華時亨〔詩1/0〕字は仲通、王永積〔詩1/0〕字は崇嚴。崇禎七(一六三四)年の進士、顧彩〔詩1/0〕(一六五〇—一七一八)字は天石、呂自咸〔詩1/1・漱1/5〕字は誠之〕らがあり、みな評者として關與している。

宜興の文人としては、まず陳維崧〔詩2/2・文1/0・漱1/3〕(一六二五—一六八二)字は其年)が挙げられる。康熙十八(一六七九)年、博學鴻詞に挙げられ、翰林院檢討を授けられた。また詞人としても知られ、黃永・董以寧・鄒祇謨(三人とも錢肅潤の知人。江蘇常州の項を参照)と併せて「毗陵四子」と稱された。「讀陳其年湖海樓集」〔詩選〕卷七)がある。なお、その弟の陳維岳〔二2/1〕(字は緯雲)は「秋日赴程周暈戶部宴四首」の序文に登場し、末弟である陳宗石(字は子萬、號は富園)に關する「陳子萬移居并贈贈」〔二選〕卷四)がある。

潘瀛選〔詩0/2〕字は仙客。順治六(一六四九)年の進士。錢肅潤に「出彰義門、答謝周立五・潘仙客・蔣慎齋諸公暨秦對巖門士」〔詩選〕卷三)等の詩があるが、これらは錢肅潤が北京滯在中に詠じたもので、潘瀛選もちょうど北京赴任中だったと考えられる。詩題に登場する周啓禱〔二1/1〕字は立五。順治四(一六四七)年の進士。庶吉士となり、官は鴻臚寺少卿に至る。蔣永脩〔詩0/1〕字は慎齋。順治四(一六四七)年の進士)も宜興の人である。

その他、曹忱〔詩1/1〕字は蓋臣、史惟圖〔詩1/0・二1/0〕字は雲臣、周季琬〔詩0/1・文1/0・漱0/1〕(一六二〇—一六八八)字は禹卿、號は文夏。順治九(一六五二)年の進士。監察御史、巡按湖南、黃百朋〔詩5/4・二1/0・漱2/0〕字は珍百)らがいる。

b. 江蘇の文人

無錫以外にも江蘇の人物との交遊は數多く見られる。以下、地域別に分けて見てみたい。

【揚州】

宗元鼎【詩0／1・21／1・濼1／2】（一六二〇—一六九八）字は定九、號は梅岑。戊戌（順治十五（一六五八））年の初夏に揚州で行われた文會について詠じた「廣陵文集歌「併序」」（『詩選』卷二）では、その従兄弟である宗觀（詩0／1・20／1・濼0／1）字は鶴問。康熙十一（一六七二）年の進士の名も見られる。⁽⁴⁸⁾ なお、その従兄弟の宗元豫（二1／0）（一六〇四—一六九六）字は子發も評者である。

許承宣【詩0／1・濼0／1】（？—一六八五）字は力臣、號は筠庵。安徽歙縣出身だが、のち揚州に寓居した。康熙十五（一六七六）年の進士。官は翰林院庶吉士、工科給事中。前述「廣陵文集歌「併序」」には、その弟許承家（詩0／1・濼0／2）字は師六。康熙二十四（一六八五）年の進士の名も見られる。

【蘇州】

蘇州吳江の人として、まず潘耒【2／2・濼1／1】（一六四六—一七〇八）がいる。字は次耕「耕」。康熙十八（一六七九）年、博學鴻詞に擧げられ、翰林院檢討となる。顧炎武の門人でもある。計東・顧有孝・吳兆騫とともに「吳中四才子」と稱せられた。「中秋同杜于皇・潘次耕飲蔣氏一梅亭「併序」」（『二集』卷三）等あり。

計東【詩2／1・濼0／1】（一六二五—一六七六）字は甫草、號は改亭。明の諸生。順治十四（一六五七）年、郷試に合格したが、順治十七（一六六〇）年に發生し江南奏銷案事件によって資格を剝奪され、その後は仕官せず、各地の賢人たちと交遊した。

沈自南【詩1／1】字は留侯。順治十二（一六五五）年の進士。山東蓬萊知縣。「寄懷蓬萊令沈留侯」（『詩選』卷一）あり。

その他、吳江の人物として張拱乾（詩1／0・濼2／0）（一六一五—一六八八）字は九臨、趙瀚（詩1／0）字

は砥之、兪南史〔詩1/0〕字は無殊、葉舒崇〔二1/0・澱0/1〕(?—一六七八)、字は元禮、徐鉉〔詩0/1・澱1/1〕(二六三六一—一七〇八)字は電發、鈕琇〔詩0/1〕(二六四四—一七〇四)字は書城、らがいる。

宋實穎〔詩1/0・澱3/4〕(二六二二—一七〇五)字は既庭、號は湘尹。長洲の人。順治十七(一六六〇)年の舉人。

その他、長洲の人物として許王儼〔詩1/1〕字は孝酌、管正儀〔詩3/0〕字は元翼、姚宗典〔詩0/1〕字は文初、らがいる。

吳偉業〔詩1/0・文0/1・澱0/7〕(二六〇九—一六七三)字は駿公、號は梅村居士。太倉の人。崇禎四(一六三一)年の進士。明朝では翰林院編脩、清朝では國子監祭酒等となった。江左三大家の一人。「恭贈吳梅村先生詩」(『詩選』卷五)あり。

王撰〔二0/1〕(二六三三—一七〇九)字は異公、號は隨庵。婁東の人。畫家としても著名な王時敏(二五九二—一六八〇)の子。「婁東十子」の一人。「贈王異公」(『二集』卷二)あり。

王抃〔二0/1〕(一六二八—一六九二)字は懌民、號は鶴尹。婁東の人。王撰の弟。「婁東十子」の一人。「都門王懌民見示歲暮書懷詩有感」(『二集』卷四)

その他、鎮江の潘鏐〔二1/0・澱0/1〕字は雙南、丹徒の錢邦寅〔詩1/1〕字は馭少、徐州沛縣の閻爾梅〔二2/0〕(二六〇三—一六七九)字は古古、らがいる。

松江

田茂遇〔詩1/1・文1/0・澱2/1〕字は楫公、號は髯淵。青浦の人。順治十四(一六五七)年の舉人となり、山東新城縣の知事に任ぜられたが、赴任しなかった。詩に巧みで、王崇簡や魏裔介と詩を唱和した。前述の通り、その

編著である『燕臺文選』に錢肅潤の文章が収録されている。「報國寺松間集歌呈田子髯淵」（『詩選』卷二）あり。

曹爾堪【二〇／二・漱〇／二】（一六一七—一六七九）字は子顧、號は顧菴。華亭の人。順治九（一六五二）年の進士。「贈曹顧菴學士詩二首」（『二集』卷二）あり。

その他、華亭の文人で吳懋謙（『詩』3／0）（一六一五—一六八七）字は六益、號は華蘋山人、陸慶臻【二一／0】字は集生、嘉定の文人で陸元輔（『二一／0】（一六一七—一六九一）字は翼王）らがいる。

【常州】

常州武進の人として、毛會建【二／2・漱1／1】がいる。毛會建（一六一二—一六八二？）字は子霞。明の諸生。文章を能くし、書に巧みでとりわけ壁窠書（大字）が得意だった。『詩選』の代表的な評者の一人。「張夏鍾司馬宴余與毛子霞于竟陵公署。時本邑胡石莊・吳晞齋・譚灌村・程培風諸先生在座。卽席賦詩余倡韻焉」（『二集』卷四）等があり、錢肅潤の旅（湖北行）に同行している様子が窺える。また、「展中秋毛子霞韻「併序」」は、序文（註）によると戊午（康熙十七（一六七八））の年の九月十五日に竟陵で毛會建と酒を飲み月見をした時に詠じた詩で、或いはこの前後のことか。黄永【詩5／0・漱2／1】（一六二二—一六九三）字は雲孫、號は艾庵。順治十（一六五三）年の進士。官は刑部員外郎となったが、のち難に遭い官を辭め、その後は文學活動に専念した。

董以寧【詩4／0・二1／0・文1／0・漱〇／1】（一六二九—一六六九）字は文友。明の諸生。詞人として同郷の鄒祇謨（『詩』2／0・漱〇／1】（一六二七—一六七〇）字は訐士、號は程村）と名を均しくし、「鄒・董」と稱された。

その他、武進の文人で龔策（『詩』2／0】字は晉之、號は天岳山人。明の諸生、毛重倬（『詩』1／1】（一六一七—一六八五）字は卓人、陳玉璣（『二1／0】（一六三六—？）字は椒峰、楊理（『詩』0／1】、字は廣明、號は逢玉。江蘇武進の人。康熙六（一六六七）年の進士。官は内閣中書、金壇の人蔣超（『二0／1・漱1／1】（一六二四—

一六七三) 字は虎臣)らがいる。

これ以外にも江蘇の文人として、南京江寧の姜鶴儕(【詩0/1】字は子翥)、南京上元の黃周星(【詩0/1:二一/0・濼7/1】(二六二—二六八〇)字は九烟)、淮安の周龍甲(【二3/2・濼0/1】字は霖公。順治九(一六五二)年の進士。山左の學政)らがいる。

c. 浙江の文人

浙江の文人との交遊で、まず特筆すべきは西冷十子との交遊であろう。西冷十子とは、浙江杭州の西冷橋の邊りに集まって作られた西冷詩社の中心的なメンバーで、彼らはおよそ杭州近邊の文人たちである。錢肅潤は少なくとも順治十八(一六六一)年と康熙九(一六七〇)年と十(一六七二)年に杭州を訪ねることが自傳「十峰主人傳」に記されている。ただし、無錫と杭州はあまり遠くないので、それ以外の機會にも足を運んでいてもおかしくない。

毛先舒【詩1/1・濼4/2】(二六二〇—一六八八)字は馳黃。仁和の人。三毛の一人で、また西冷十子の一人でもある。「毛馳黃・陸盡思・王古直・顧受嘉・祝雍來・林元椒・王丹六・沈禹誠諸子招飲湖濱優敘賦贈」(『詩選』卷四)は、西湖の畔で毛先舒ら杭州の文人諸子の酒宴に参加した際に詠じた詩である。このうち、陸盡思とは陸進(【詩0/1:二1/0・濼0/1】字は盡思、仁和の人)のことである。

陸圻【詩2/1・濼1/1】(二六一四—?)字は麗京。錢塘の人。西冷十子の一人。「雨中陸麗京過訪却贈」(『詩選』卷四)あり。

孫治【詩2/1・濼1/0】(二六一九—一六八三)字は宇台。仁和の人。西冷十子の一人。「孫宇台訪余昭慶寺寓樓賦贈」(『詩選』卷四)がある。昭慶寺は杭州西湖近くにある寺であり、恐らく錢肅潤が杭州滞在中の詩であろう。

その他西冷十子として、張綱孫〔詩0／1・漱0／1〕字は祖望、號は秦亭。仁和の人、柴紹炳〔詩0／1〕（一六一六一六七〇）字は虎臣。仁和の人〕がいる。

王暉〔二1／0・漱2／2〕（一六三六一？）字は丹麓、號は木菴。仁和の人。明の諸生。杭州文壇の重鎮の一人で、西冷十子の大多数とも交遊があった。⁵⁰その著『今世説』（卷三）に錢肅潤に關する記述（前掲王士祿の評）が見られる。『檀几叢書』（張潮と共編）や『文津』（未詳）等、錢肅潤の『文漱』と同じような他者の文章を集めた叢書を編纂している。その他、浙江の人物として、朱彝尊〔二0／1・文1／1〕（一六二九一七〇九）字は錫鬯、號は竹垞。秀水の人、徐緘〔詩0／1〕字は伯調。山陰の人、孫光裕〔詩2／0〕字は子長。嘉善の人、徐倬〔二1／0〕（一六二四一七一一三）字は方虎。德清の人、陳祚明〔二1／0〕字は胤倩。錢塘の人、陳錫蕃〔二1／0〕字は康侯。鎮海の人、嚴我斯〔二1／0・文0／1〕（一六二九一？）字は存菴。湖州の人。康熙三（一六六四）年の進士。山東鄉試主考官。官は禮部左侍郎、爰丹生〔二1／0・漱0／2〕字は山夫。桐廬の人〕らがいる。

d. 湖北の文人

前掲の自傳によると、錢肅潤は順治十三（一六五六）年に湖北・湖南地方、武昌・岳州・衡州・祁陽各地を訪れている。また、康熙十七（一六七八）年には武漢や竟陵（天門）を訪ねており、その時に交遊した人物もいると考えられる。譚篆〔二1／1・漱1／0〕字は灌村。天門の人。「張夏鍾司馬宴余與毛子霞于竟陵公署。時本邑胡石莊・吳晞齋・譚灌村・程培風諸先生在座。即席賦詩余倡韻焉」（『詩選』卷四）は、竟陵の司馬だった張汝瑚〔詩0／1・二2／0〕字は夏鍾。福建晉江の人〕が、錢肅潤及び毛會建（前掲）と官署で宴會を催した時の詩で、譚篆とともに参加したのは、同じ天門出身の胡承諾（字は君信、號は莊石。崇禎九（一六三六）年の舉人）・吳晞齋（不詳）・程飛雲（字は培風。順

治十一（一六五四）年の解元）であった。

また、漢陽の人として、羅世珍（二一〇／〇・濼〇／一）字は魯峰。順治十四（一六五七）年の貢生、熊正笏（二一〇／〇）字は元獻。康熙十一（一六七二）年の貢生）らがいる。

e. 河北周邊の文人

前述の自傳の記述から、錢肅潤は少なくとも順治十二（一六五五）年・康熙五（一六六六）年・康熙九（一六七〇）年の三度北京を訪れている。その内康熙五（一六六六）年は、前述の通り吏部尙書であった魏裔介との面會が目的の一つだったと思われる。その他河北の人物として、以下のような人物の名が見られる。

周體觀【二二三／〇・濼〇／四】（二六一八—一六八〇）字は伯衡。河北遵化の人。順治六（一六四九）年の進士。翰林院庶吉士に選ばれ、のち戸部・吏部給事中となった。『二集』の評者の中心人物である。

湯調鼎【二一九／一】字は右君、號は旨庵。河北清河の人。順治四（一六四七）年の進士。官は湖南岳州知府。「送別湯右君還清河」（『二集』卷二）あり。

張能鱗【詩〇／一・文一／〇】（二六一七—一七〇三）字は玉甲、號は西山。河北大興の人。順治四（一六四七）年の進士。官は浙江仁和知縣、四川按察使副使等を歴任した。「恭謝張西山文宗詩」（『詩選』卷四）あり。

f. その他の地方の文人

曾畹【詩二／一・二一／〇・文一／〇・濼一／〇】原名は傳燈、字は庭間。江西寧都の人。弟曾燦（二二三／一・濼一／〇）原名は傳燦、字は青藜）とともに詩詞文章に巧みであった。後剃髮して僧となって各地を巡り、冀鼎孳らと交遊

した。「送曾庭聞之寧夏」（『詩選』卷一）あり。

程可則【二一／二】（二六二四—一六七三）字は周量。廣東南海の人。順治九（一六五二）年の狀元。「秋日赴程周量戸部宴四首【併序】」（『二集』卷二）は、程可則が戸部主事として北京に任官していた康熙八（一六六九）年頃のもののか。

この酒宴には朱彝尊・陳維岳・陸慶臻・彭師度・李良年・冒禾書ら、多數の文人たちが参加している様子が窺える。

程康莊【詩0／1・二3／0・文1／0・漱1／0】字は崑崙。山西武郷の人。「讀程公崑崙自課堂文集」（『詩選』卷一）あり。

施端教【二一／0・文0／1】（一六〇三—一六七四）字は匪莪。安徽泗州の人。「施匪莪嘯閣文集序」（『文選』卷三）あり。

茆荐馨【二一／0】（二六二九—一六八一）字は楚畹。安徽宣城の人。「過吳興懷茆子楚畹」（『二集』卷二）あり。

その他、楊履吉（二一／0）字は長公。湖南寧郷の人、黃元治（二一／1）字は自先。江西德興（一説に安徽歙縣）の人。康熙十五（一六七六）年の進士、黎元寬（詩0／1）（一六〇八—一六八七）字は博菴。江西南昌の人。崇禎元年（一六二八）年の進士、施璜（二一／0）（一七一七—一七〇六）字は虹玉。安徽休寧の人）らがいる。

その他、僧侶や錢肅潤の家族も登場するが、本稿では割愛する。

おわりに

以上、『十峰詩選』及びその中に見られる錢肅潤の交遊關係について考察した。その關係は、地元無錫を中心とする江南だけに留まらず、中國各地にまで及ぶものであり、錢肅潤の交遊の幅廣さの一端を窺うことができる。また、後に

編纂された『文激』との関係を考えて、以上のような交遊が、掲載作品の収集や提供、評語の制作等にも影響を及ぼしていると思われる。しかし、本稿ではそのほんの一端について述べたに過ぎず、錢肅潤の交遊関係の實態や詳細を探るためには、更なる調査・分析が必要であろう。今後は、更に明末から清初における江南を中心とした文人文化の有りに様に迫っていきたい。

注

- (1) 『錢肅潤『文激』について』（『漢學會誌』六十一號・二〇二二年三月）
- (2) 張慧劍編『明清江蘇文人年表』（上海古籍出版社・二〇〇八年）による。
- (3) 前號論文5頁1行目下部に附した注で、この出來事を甲申の變後の閩黨による東林・復社への疑獄事件と記した、これは誤植である。正しくはこの注は4頁後ろから3行目、「二（一六四五）年」に放逐されてからは「逐」の部分に挿入すべきである。この場を借りて訂正させていたきたい。
- (4) 『無錫文庫』第四輯、第八十八冊（鳳凰出版社・二〇二二年）
- (5) 『清代詩文集珍本叢刊』（國會圖書館出版社・二〇一七年）第七十五・七十六冊にも所收。また中國國家圖書館にも所藏されており、二〇二二年十二月現在、ウェブサイトで「中華古籍資源庫」(<http://read.nlc.cn/thenath/DataSearch/toGujIndex>)にて畫像の閲覧が可能である。
- (6) 以下、徐志鈞と提示した場合はこの解説文を指す。
- (7) ただし、注5で掲げた中國國家圖書館本は、その歛損状況から見ても恐らく同版であると推定される。
- (8) 清・黃虞稷『千頃堂書目』卷二十八に錢肅潤の作品として見られる。
- (9) 史可程「十峰草堂詩餘序」、徐喈鳳「十峰草堂詩餘序」、丁澎「十峰草堂詩餘題辭」（以上『文激』卷七）あり。なお、丁紹儀『國朝詞綜補』卷二に詞が一首収録されている。
- (10) 錢謙益『牧齋有學集』卷一に「十峰詩序」として収められる。
- (11) 「梁溪言理學者、必推顧・高兩先生。顧有理學者未必有氣節、有氣節者未必有文章、兩先生於理學・氣節・文章三者實兼之。其

激頑振儒、有功世道人心匪小」

- (12) 錢肅潤に「恭贈虞山牧齋宗伯八十壽詩」(『十峰詩選』卷五・五言排律)がある。これを指すのであれば、錢謙益と會見したのは康熙元(一六六二)年のことか。

- (13) 「：礎日恂恂儒者、琢磨道德、礪礪名節、爲文原本經術、駁駁登作者之堂奧、而撤其藩籬。不居然以理學・氣節・文章自命歟。昨者、礎日自梁溪來訪余於半野堂、贈以長律六十韻、鋪張揚厲、藻績滿眼。旋出其平日所爲十峰詩屬余敘。余讀之目瞪神動、喟然歎曰、嗟乎、此可以知礎日之人也已。礎日爲理學・氣節・文章中人、故其爲詩也、志意發越、元氣盤鬱、粹然一歸於中正。：讀礎日之詩、以觀礎日之人、礎日其眞理學文章中人也。願礎日自愛且自勉、以無愧兩先生也。謹序」

- (14) 錢陸粲『詞雲齋文鈔』(『四庫未收書輯刊』第七輯第二十三册)「詞雲齋門人總序」の筆頭に錢肅潤の名が見られる。

- (15) 魏裔介は康熙三(一六六四)年に吏部尙書になっている。

- (16) この後、錢陸燦は、唐の韓愈が貞元十一(七九五)年に三度にわたつて時の宰相に自身の所信を上書したが、全て受け入れられなかった、という故事を引き合いに出して論じる。

- (17) 「礎日前有刻詩數百葉矣。庚子冬、僕將訪友廬江、風雪枳道、倦而假臥梁溪洞墟宮。爲礎日選詩了、其卷帙許序而行之。丙午、刻十峰詩選成、寄僕於秣陵、促踐前諾也。礎日以書報僕曰、潤有史論數十篇、爲今相國柏鄉公賞識。潤家食不能活妻子、將北遊掃柏鄉公之門而盡獻其所作詩。僕以書賀之曰、子之遭、殆過韓退之也。：：山左宋荔裳・王西樵・阮亭兄弟、吾鄉董玉虬・蕭公木・馬野臣、海寧陳謝浮諸兄、曩日曾以筆墨相商略者、出子詩。以是正知僕選之不誣也。遂書其語爲序」

- (18) 「：吾友錢子礎日、其爲文也奇矣。平生蓋嘗涉洞庭越彭蠡、歎哈山川、吞吐烟雲。故發爲文者自有嶽寄磊落・慷慨激昂之致、溢於行墨間。錢子其殆子長之流與。一日、余同過山左青齊・海岱之地、罔不周歷。錢子每至一處、輒爲奇文傳之。三載以來、詩詞傳記疊疊成帙、而詩爲尤多。及歸、將附剗刷而問序於余。余謂、錢子之詩、因遊而作也。錢子豈漫爲詩者哉。有大豪俠如平原君則咏之、有大忠義如顏魯公遜國七忠則咏之、咏帝王則爲舜爲禹、咏聖賢則爲孔爲顏爲閔。過太公伯夸隱見處有詩、過秦・漢・唐・宋禪處有詩。諸如淳于之放曠・仲連之椒蠶・伏生之博學・太白之風流・范公楚公之德政、靡不鋪張揚厲、形之歎咏、下至趙松雪・李于鱗遺韻猶存、流連弗輟。最異者躡突泉歌一章、於古之屈而不伸與夫大屈大伸者、反復相證以抒寫其憤懣不平之氣、千載下如見之。噫嘻、錢子之詩、豈非以遊而益奇耶則信乎。文之奇之斷在遊也。錢子行將徧遊五嶽以盡發會中之奇焉。過此以往、吾不知其文之奇何如矣」

- (19) その他、『文瀾』卷十七に吳其馴「錢礎日史論題辭」あり。
- (20) 『陳迦陵文集』卷二「錢礎日史論序」
- (21) 徐志鈞氏は、『文選』前有高世泰、秦松齡序」とするが、恐らく前掲高世泰「史論敘」、秦松齡「史論序」を指しているのではないか。ただし他にも序文はあるので、何故この二つを挙げたのかは不明。
- (22) 秦松齡「史論序」に「天下傳誦之者、善者必有以勳、惡者必有以懲」云々とある。
- (23) 董閻「史論小序」に「先生、今之歐陽子也」とある。
- (24) 「十峰文選、錢子礎日所著也。錢子爲子族姉之夫。少與子同學、文譽最早。既又與子勝文涵之會、四方諸君子無不願從錢子遊。是時錢子已工古文詩歌。甲申後錢子植高節、子浮沈于世、有愧于錢子。既而各遊四方、別寸年、先後歸里門。錢子盡出平所著書示子。詩以泰山闕里爲冠、其文昌明博大、議論所加、不愧蘇氏父子。其門人秦太史對巖、稱其能使善者勤、惡者愆。董太史方南以盧陵誦其師知言矣。子則謂、錢子今日之文中子。……」
- (25) 陸機「文賦」に「棼風飛而森豎、鬱雲起乎翰林」とある。
- (26) 「……今年秋、晤礎日錢子于鄂邱、未及讀其詩、出其古文詞數十首與子霞。毛子讀之、墨采騰奮、博議瀾翻、如江河本于岷嶓、如諸儒訂異同于虎觀。蓋其學古窮經有年。故能棼風鬱雲、就班按部、殆今日作者之林也」
- (27) 前掲「十峰主人傳」に見られる。
- (28) 「卷一爲史論、卷二至卷七爲古文」
- (29) 「……聞自辛丑歲得從先生遊。先生道日尊、伺候於門牆者日益衆。而聞也、遠隔百里外、不得朝夕繼見音問久疎。今年春辱以所著史論一編命聞識而行之。夫先生史論、經邦鄉魏公之品題、與諸鉅公所論定、自足千古、非後學輩所能贊美而稱道之也。……」
- (30) 「此卷向二十餘首、今照柏鄉魏相國選本數首以誌、知已餘悉刪去不載。其近稿皆係鉅鹿公評定、併附入集中、彙爲一卷云」
- (31) 『四庫全書存目叢書』集部第三八六冊所收。康熙元（一六六二）年刊。
- (32) 『四庫禁毀書叢刊』集部第一二二冊所收。順治十三（一六五六）年刊。
- (33) 「蓋錢去世後文字獄頻現、家人或收藏之人爲避禍計、將有違礙之文抽去、而不忍一毀了之」
- (34) 各人物の調査については、正史や各個人集のほか、前掲張慧劍『明清江蘇文人年表』、楊同甫編『明人室名別稱字號索引』（上海古籍出版社・二〇〇二年）、楊廷福・楊同甫編『清人室名別稱字號索引』增補本（上海古籍出版社・二〇〇一年）、周駿富編『明代傳記叢刊』（明文書局・一九九一年）、同編『清代傳記叢刊』（明文書局・一九八五年）、朱保炯編『明清進士題名碑錄索引』（上

- 海古籍出版社・一九七九年)、陳文新主編『中國文學編年史 明末清初卷』(湖南人民出版社・二〇〇六年九月)などを適宜参照したが、紙数の都合上特別な場合を除いて一々提示しないこととする。
- (35) ただし、評者の中には同時に作品に登場する人物と重複している人物も少なくないが、その場合は評者として数えた。
- (36) 總數(評者數十作品登場人物數)
- (37) なお、前號でも言及している人物も含まれており、こちらも参照されたい。
- (38) 「贈衡山門人蕭璞孫」(『詩選』卷二)
- (39) 「贈道州門人常石門」(『詩選』卷二)
- (40) 「贈吳江門人朱漢直」(『詩選』卷三)
- (41) 「南蘭門人楊賡音遊庠賦贈」(『詩選』卷三)
- (42) 「贈新安門人許云吉」(『詩選』卷三)、「同許孝酌及門人許云吉輩遊獅山」(『詩選』卷四)
- (43) 「送門人丁永思歸潛山」(『詩選』卷四)
- (44) 「送門人蔣六息歸懷寧」(『詩選』卷四)
- (45) 「寄懷婁東門人楊巨山」(『詩選』卷四)
- (46) 「過漢陽適吳捷三門人見訪却贈」(『詩選』卷七)
- (47) 清・華希閔、王鎬『無錫縣志』卷二十九「己未詔舉博學鴻儒、宋相國德宜以肅澗名應詔、以足疾辭」
- (48) 序文に「戊戌首夏、余駐維揚、有待學文英之舉。同學李子浩原・申子周伯・許子力臣、師六・宗子定九、鶴問・卞子雲郭、各率親知・子弟及門人輩、以進英才雲集蘭籍燦然。爰作歌以誌大邦人文之盛云」とある。
- (49) 「戊午九月十五日、過竟陵寓丹臺、觀是夜月色佳甚不減。中秋、毛子子霞置酒橋亭、呼余偕飲、賦詩賞之」
- (50) 王暉の交遊關係については、拙論「王暉の交遊關係について」(『漢學會志』五十六號・二〇一七年)参照。